

# かたりべ113

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

## ■横山光輝と豊島区

横山光輝は、一九六〇（昭和三五）年から豊島区千早に新居を構え、没するまでの四五年間、この地を拠点にマンガ作品の創作をしてきました。転居前の一九五六（昭和三一）年から約一一年間連載された「鉄人28号」をはじめ、「伊賀の影丸」、「仮面の忍者赤影」、「パビル2世」、「魔法使いサリー」、「ジャイアントロボ」、「三国志」など二〇〇点以上の作品が豊島区で創作され世に送り出されたのです。戦後のマンガ文化を支え、一九六〇年代全般の繁忙期には、一日二時間の睡眠で、ひと月六〜九本の作品を抱え、月平均約五〇〇ページの原稿を描いていたという横山は、まさに【マンガの鉄人】と称されました。

## ■上京のきっかけ

一九三四（昭和九）年六月一八日に神戸市須磨区に生まれた横山光輝は、一九五五（昭和三〇）年三月に、大阪の貸本マンガ専門出版社東光堂から『音無しの剣』で本格デビューをします。一九五六（昭和三一）年、雑誌『少女』の打ち合わせで東京の出版社へ出向いたとき、たまたま持っていた貸本マンガ向けのマンガ原稿を、雑誌『少年』の編集者に見せたところ、タイトル変更はあるものの即採用決定となりました。この時の作品が「鉄人28号」だったのです。これを機に、横山は神戸から上京し、新宿区内で居を転々としながら四年後、豊島区に新居を構えることになるのです。

ミュージアム開設イベント 第一回 開催場所：東京芸術劇場5Fギャラリー2

企画展 「生誕八〇周年記念 横山光輝

「昭和から平成へ マンガの鉄人が駆け抜けた軌跡」

会期：二〇一四（平成二六）年一〇月一日（水）〜一〇月八日（土） ※一〇月六日（月）は休館

開館時間：九時半〜十七時（最終入場十六時半） 最終日は十六時閉館（最終入場十五時半） 観覧無料

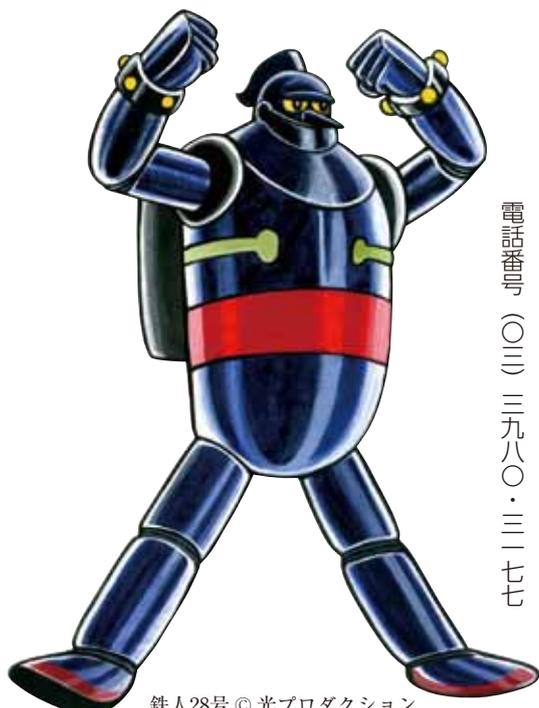
## ■展示のみどころ

昭和から平成にかけて、マンガ文化史上記憶と記録に残る大きな功績を残してきたマンガ家横山光輝の生誕八〇周年にあたる今年には、同時に没後一〇年の節目の年でもあり、豊島区ゆかりの文化人として、横山光輝の展示会を開催します。光プロダクションの協力と監修により、これまで未公開だった原画・原稿を含む五一点の複製原画を製作し展示します。また、横山作品の出版や映像化に関わってきた方々の取材協力を得て、横山光輝の人物像を貴重な資料やパネルでご紹介します。

（文学・マンガ 荒川）

□お問い合わせ先 文化デザイン課ミュージアム開設準備グループ

電話番号（〇三）三九八〇・三二七七



鉄人28号 © 光プロダクション

# 学校教材のなかの考古学 — 教科書と考古資料模型 —

教科書やノート、筆記用具をランドセルに詰め込んで小学校に通った記憶は、多くの人にとって懐かしい思い出ではないでしょうか。毎日、使っていた学びの道具は、進級・進学・卒業などを機にいつしか、私たちの手を離れていきます。もしかしたら、賞状や記念品は家のどこかに残されているかもしれませんが、日常のなかで、いつも身近にあった道具ほど残らないものです。

現在、当館で開催している秋の收藏資料展「博物館資料になった学びの道具」は、そんな誰もが一度は使っていた記憶のある学びの道具を、五つのキーワードごとに紹介して、道具から垣間見える学校生活の一端を探っています。



①郷土資料館大ケース正面



②日本太古遺物模型（ノーベル社製作）



③異一太郎模作埴輪、上品の舞姫



④小学国語読本 卷十二（国定第四期）

今回はそのなかから、「触れる」で紹介している埴輪や土器・石器の模型、考古学的教材がとりあげられた教科書に焦点をあてて、学校教材のなかの考古学についてみていきたいと思います。

「学制」の発布によって、「邑二不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメン」と国民皆学の方針が示された一八七二（明治五年）年、文部省から小学校（高等小学）の史学大意用教科書として『史畧』が発行されます。以来、一九四六（昭和二二）年に、文部省より『くにのあゆみ』が発行されるまでの間、多くの歴史教科書は、『古事記』・『日本書紀』（以下、「記紀」）の記述をもとにした神話を、歴史の出発点としてきました。一方で、一八七七

（明治一〇）年のE・S・モースによる

大森貝塚の発掘調査以来、蓄積された近代考古学の研究成果も、「記紀」の記述と整合性をとりながら、検定制度のもと、徐々に歴史教科書のなかで紹介されるようになっていきます。しかし、一九〇三（明治三六）年に教科書の国定制度が成立して以後、考古学的教材の多くが、歴史教科書から姿を消してしまいます。

そんななか、一九三九（昭和一四）年、文部省より翻刻発行された国語教科書である、『尋常科用小学国語読本』巻十二（④）に、考古学者の浜田耕作が執筆した「古代の遺物」がとりあげられていることに

は、当時の考古学と歴史教科書の距離を感じさせます。石器時代、青銅器時代、鉄器時代からなる三時代区分法を日本史に適用して、神話の世界とはまったく別の考古学に基づいた歴史を叙述したこの文章は、同時期の歴史教科書の冒頭が、「天皇陛下の御先祖を、天照大神と申し

あげる。」からはじまるのとは対照的です。一方で、考古資料模型は昭和のはじめ頃にもすでに、製造・販売されていました。日本太古遺物模型（②）を製作したノーベル社によれば、同模型は、実物の考古資料を教材として販売することが少なくなつた一九三五（昭和一〇）年頃から、一九八八（昭和六三）年頃まで製作していた模型で、戦前・戦中には主に中学校・高等女学校に向けて、戦後は小学校にも、内容をほとんど変えずに販売していたとのこと。模作埴輪（③）手前二

体）を制作した異一太郎は、東京美術学校（現東京藝術大学美術学部）を卒業後、東京帝室博物館（現東京国立博物館）を経て、戦後、豊島区の公立中学校で教鞭をとりました。上品の舞姫（③奥の一体）は、同氏が塑像として制作した作品で、実際の埴輪とは異なる、耳や指先の細やかな表現がみられます。（郷土 甲田）

# 高田町の工業化と「下水道計画」

大正から昭和期にかけて、豊島区内の旧町(巢鴨・西巢鴨・高田・長崎町)の多くでは、急速な市街地化が進められました。高田町の戸数と人口の増え方をみると、一九二二(大正元)年には、一七四九戸・六五九五人でしたが、一九三二(昭和六)年には一万二〇四二戸に増え、人口も四倍の四万九九七八人となっています。

町が市街地化すると、土地の利用状況もめまぐるしく変化し、大正元年に二六畝余(約二五七九㎡)あった田地が昭和五年には二畝余(約一九八㎡)に減少し、七九畝余(約七八三五㎡)あった畑地が一・二畝余(約一九〇㎡)になっています。

実際、神田川沿いには田岡メリヤス(大字高田在)やラジウム製薬(同)など、多くの工場が建設され、工場経営者と業者が町に転入してきています(横山恵美「北豊島郡の工業化について」、地方史研究協議会編『江戸・東京近郊の史的空間』所収、二〇〇三年)。

職業別の割合をみると、昭和五年の段階には農業従事者数三〇八人に對し、工業は六四七五人であり、総人数に對する

割合は三五・六%で就業者率は第一位となっています。

このように、江戸時代には近郊農村として野菜を中心に栽培することで、生活を営んでいました。しかし、その姿は徐々に失われ、町は工業都市への道を歩み、近代化していったのです。

急速な町の発展は、多くの富を産出しましたが、一方でゴミ対策や下水道整備が遅れ、その結果伝染病が流行しました。主な伝染病は腸チフス、疫痢・赤痢、ジフテリア、猩紅熱など消化器系の感染症で、人口一〇〇〇人に對し五人の患者数でした(『豊島区史』通史編二)。

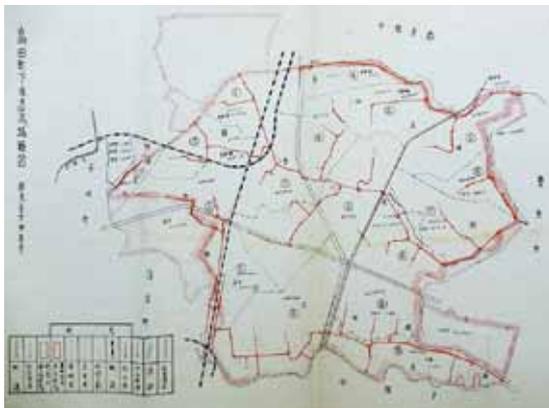
郷土資料館蔵 高田町下水道計画説明書



郷土資料館蔵の「高田地区関連文書類」には、「下水道計画説明書」という文書が残されており、下水道敷設に関する情

報が詳細に記されています。そこで、今回はその内容についてご紹介したいと思います。

まず、下水道整備の理由としては、東京都市計画事業による交通網の発達や田畑が市街地化して、水路溝渠や下水の排泄が極めて不良になったことなどがあげられています。特に、消化器官病患者の発生や悪臭・集中豪雨による氾濫など公衆衛生を懸念した計画であることが強調されています。本書では、昭和五年施工で、昭和一一年竣工となっていますが、実際の工事は昭和一三年まで続き、事業は東京市に引き継がれました。



高田町下水道流域略図 縮尺1/10,000 (計画書内添付)

さて、計画で最も課題となったのが、下水排除の方法でした。高田町の道路の

多くは、狭くて曲折しており、またすでに水道管やガス管、電話線などが地中に敷設されていました。そのため、汚水や雨水別に下水道を新設すること(分流法)は不可能でした。

そこで高田町は、一本の下水道を敷設して同時に汚水・雨水を通させること(合流法)を計画したのです。排水の区画は、天然の区間を基準とし、音羽・鶴巻川・谷端川・神田上水の四流路に分別され、その下水幹線の流路の多くは現在も使われています。

秋の収蔵資料展では、昭和黎明期における高田町の行政文書を中心に展示し、当時のインフラ政策や救済施策などを紹介しています。たくさんの方々のご来館をお待ちしております。(郷土 高木)



2014年度秋の収蔵資料展  
「高田町にみる豊島区の昭和黎明期」

# 博物館が伝える資料の背景 — 蚊帳 —

## ■蚊帳は遠くなりけり

一般的に、夏の夜、就寝中に蚊から身を守るために蚊帳に入っていたのは、昭和三〇年代後半から昭和四〇年代頃までだったでしょうか。今では、蚊帳を見たことも使ったこともない人が多くなり、仲間外れになることを、「蚊帳の外に置かれる」という言い方に実感が無い人もいるでしょう。また、夏の夕立、雷が鳴ったときに蚊帳を吊り、中に入れば怖くなく、雷は落ちないといわれた経験者も少なくなっていることでしょう。

当館では、資料のデータベース化を進めています。今回は、資料のなかから蚊帳をとりあげます。むかしは、どの家

でも使っていたものですが、資料整理をして感じたことを述べたいと思います。

## ■さまざまな蚊帳

保管している資料が虫に喰われていないか、また、資料番号票がきちんとついているか、①のようにして点検しています。

②は一般的に使われていた蚊帳です。萌黄色（黄色がかった緑色）で、周囲に茜色（ややくすんだ赤色）の縁取りがしてあり、麻織りの布を縫い合わせてあります。織目は、当然、蚊が入ってこない大きさです。蚊帳の隅には金輪がついていて、和室の長押のくぼみには、金輪が吊り下げられるようになっていました。

蚊帳の大きさは、四畳から一〇畳用の

ものがあります。なかには、白地で、裾が青色でほかした涼しげなものもあります。そのひとつは、昭和一一年に結婚した人が、昭和三〇年頃まで使っていたというものです。このような使用記録とともに、資料として蚊帳を収蔵しています。

朝、起きれば、③のように、蚊帳を畳みます。そして、寝るときには、また吊り入って寝るので、親や年長の兄弟が蚊帳を畳みました。畳み方にも一定の方法があり、畳み方を間違えると、吊るときには、とても面倒なことになりました。

④は、冬に使う蚊帳です。それを、紙帳といえます。和紙を何枚も糊で貼り合わせて作られており、これを吊るのは、室内に入る隙間風を避けるためだったということです。寄贈者からは、明治から大

正時代に使用したとうかがっています。身近な蚊帳は、子どもの玩具にもみられました。⑤は、幼子が母衣蚊帳のなか

にいるもので、これは、明治末年生まれの方の雛人形の段飾りのとき、その雛段の下の方に飾られたものです。

## ■これからの蚊帳

生活様式が変わり、網戸が使われ、今、蚊帳を使用する家はないかもしれませんが、世界に目を向ければ、感染症から身を守るために日本の蚊帳が利用されると聞きます。また、国内では蚊帳は、電気も薬品も使わないことから、エコロジーの面から見直されている点もあるようです。今回は、蚊帳に入るときの作法、畳み方等、博物館はものだけを保管するのではなく、その背景も伝える場であることを実感しました。（郷土 福岡）



①2014年7月、収蔵庫のある旧第十中学校。ロープを張り、蚊帳を下げ、風を通す。



②庭に作業用の白布を敷き、蚊帳全体を撮影。さあ、気持ちを合わせてパチ！



③小学校高学年になると畳めるようになる。みんな！畳み方を覚えてね。



④紙製で十畳用。蚊帳に外光が入るようにと、一部は透明なセロハンのような紙になっている。



⑤これは天井部が平ら。幼子の昼寝用の簡易な開閉式の蚊帳もあった。

# 清戸道の復権（上）

## 豊島の遺跡第十二回

現在の「目白通り」にほぼ沿って古道がありました。明治時代に「清戸道」の名前で記録に見えるこの道の成立については、これまで二つの考え方が出ています。確かにこの道は、江戸時代に江戸と練馬や北多摩地域を結ぶ大切な役割を果たしていたようです。しかし「清戸道」の成立事情については、改めて見直しても良いのではないかと思うのです。

※ ※

文京区関口付近を起点としてほぼ西に向かう「清戸道」は、豊島区内では鎌倉街道と直角に交差（目白通り「高田一丁目」交差点）した後、南長崎を経て練馬区・新座市を横断し清瀬市上清戸・下清戸付近（武蔵国多摩郡清戸）に至る20km強の街道です。（以下、図を参照）

「清戸」は隅田川の支流である柳瀬川に面しており、中世には柳瀬川を使った舟運の北多摩地域での拠点（物資の集散地）だったと思われます。この清戸の柳瀬川を挟んだ対岸には、清戸の町を正面から睨むように、現在「滝の城」と呼ばれている15〜16世紀に機能していた城郭

があります。当時、清戸と滝の城は一体のものだったと考えられるのです。

さて、中世の軍記物『鎌倉大草紙』によると、一四五七（長祿元）年に、上杉持朝が河越城を、太田道真・道灌父子等が江戸城・岩付城（岩槻城）を築城したといえます。これは、ほぼ同時期に造られた三つの城を結ぶ連絡路が確保されていたことを示唆しています。

従来、このうちの江戸城・河越城間の連絡路は、現在の川越街道とされてきました。ところが『道灌状』と呼ばれる太田道灌の書状に興味深い記事があります。「江戸近所豊島勘解由左衛門尉・同弟平右衛門尉所構対城候之間、江戸・河越通路依不自由…」というのがそれです。これによると、豊島勘解由左衛門とその弟平右衛門尉が、両所（石神井城・練馬城）に対城を構えたので、江戸城と河越城の連絡が不自由になったということです。同様のことが『鎌倉大草紙』にも、豊島氏の兄弟が「石神井の城・練馬の城を取り立て、江戸・河越の通路を切り取り…」と記されています。この記事を手掛りにした謎解きは、次号にて。（郷土 橋口）

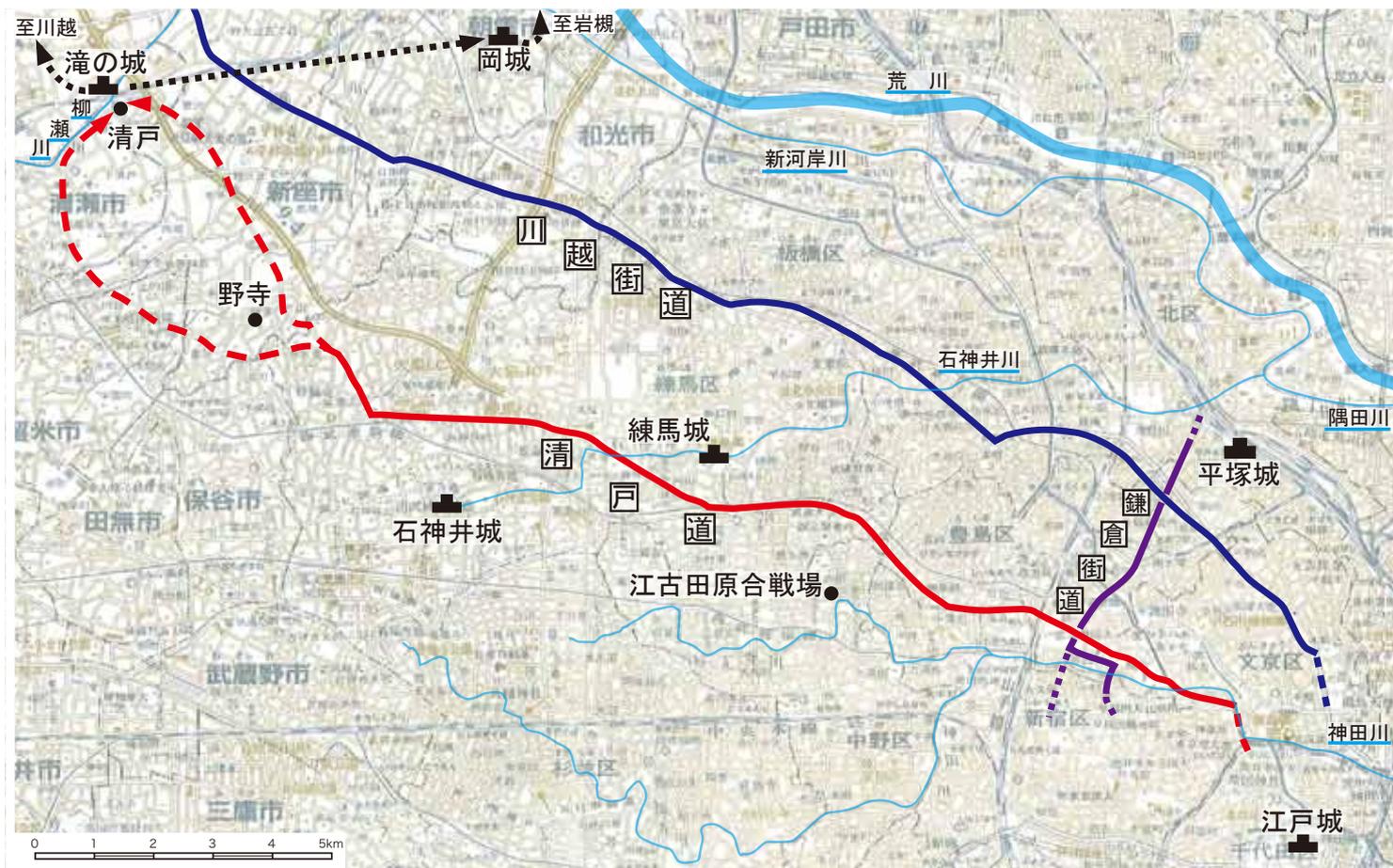


図 清戸道と周辺の関係遺跡

# 作品を見つめる

## 2 | 吉井忠

左の二点は、絵画でありながら絵画とは思えないような、いびつな形をしています。それもそのはず、作者の手によって大胆に切断されたのです。元々は一つの大きな作品でした。①の左下に見える腕の一部と黒い衣服は、②の女性の左肘とスカート部分にびたりと重なります。この作品《ひとびと》は、なぜ切断されたのでしょうか。

作者は、福島県出身の画家・吉井忠（一九〇八—一九九九）です。福島中学



①吉井忠《ひとびと》1948年、油彩・カンヴァス、144.5×156.0cm、豊島区蔵  
②吉井忠《ひとびと》1948年、油彩・カンヴァス、98.0×64.2cm、豊島区蔵



③吉井忠《ひとびと》制作年不詳、水彩・墨・コンテ・鉛筆・紙、51.0×67.4cm、豊島区蔵

を卒業後、一八歳で上京。太平洋画会研究会に入り、麻生三郎や寺田政明らと親しく交流します。豊島区に住み始めたのは一九三七年です。以来六〇年余（\*）豊島区を拠点に、いかに「人間」を描くか、ということを追求め続けました。吉井が自らの自画像とも呼ぶ、群像を描いた作品の一つが《ひとびと》です。空のボウルを手に虚ろな表情を浮かべる女性に、顔を手で覆い嘆き哀しむ女性、女性の腕の中でぐったりした裸の子とそれを仰向けの頭部が描かれています。失われた全体像は、残された下絵③か

ら推測することが可能です。右端には、座り込む女性と裸の子を見つめる男性が、中央下には、地面に倒れ込んだ人物と車輪が描かれていたことがわかります。

一九四五年四月一三日深夜から一四日未明にかけての城北大空襲で、豊島区約七割が焼失しました。空襲時、画家仲間のアトリエの消火に奔走した吉井は、空襲後、焼野原の様子をいくつもスケッチし、記録しています。それから三年後の一九四八年に、空襲の記憶を作品の中に刻印したのが《ひとびと》なのです。

背景に澄み渡る青い空とは対照的に、空襲後の乾いた焦土が、遙か地平線の彼方にまで広がっています。嘆き、うな垂れ、茫然とする人々の中で、地面にすつと立つ裸足の少年の姿が、悲しみの象徴のようにも、絶望から立ち上がる一筋の希望のようにも感じられます。

それにしても、吉井はなぜ作品を切断したのでしょうか。もはや吉井にその答えを聞くことは叶いません。「父が絵を切ったことには、特に理由なんてないのよ」と長女の爽子さんはおっしゃいます。意味のあることと、無いこと。作品を見る・読むことの不思議が、このエピソードの中にも潜んでいます。（美術 清水）

\*戦中戦後の、福島に疎開していた期間を除く。

### 編集後記

『かたりべ』113号をお届けします。秋風が心地よい季節、皆さまいかがお過ごしでしょうか。出歩きやすい気候になり、各地の博物館で、展覧会が多く開催される時期となりました。豊島区でも、東京芸術劇場五階ギャラリー2で、企画展「生誕八〇周年記念 横山光輝 昭和から平成へ マンガの鉄人が駆け抜けた軌跡」(一〇月一日(水)～一〇月一八日(土))、郷土資料館では、秋の収穫資料展「博物館資料になった学びの道具」読む・書く・触れる・着る・運ぶ」・高田町にみる豊島区の昭和黎明期」(九月五日(金)～一二月七日(日))を開催しています。両会場は歩いて十分ほどの距離です。皆さまお誘いあわせのうえ、ぜひ合わせてご覧いただければと思います。なお、郷土資料館の学芸員がわかりやすく展示を開設する、「展示みどころ解説」は、九月二十七日(土)、一〇月二十五日(土)、十一月二日(土)の一四時から開催いたします。当日、展示室でお待ちしております。(郷土 甲田)

### かたりべ No.113

2014年9月30日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan>